小城の歴史

円城寺大麓

小城城の鬼門除け

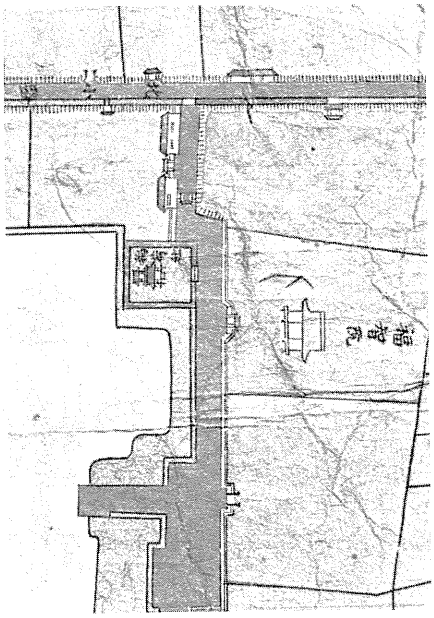
稲荷社と護摩堂がたてられる

太田保一郎

北東即ち丑寅の方角を鬼門といふは、其所に鬼星といふ、あしき星がゐるから、此方角を除けねばならぬとの説は、古くからある。

元来支那の五行説に、仏家の説を加味したものである。免に角、家を造るにも、城を築くにも、東北隅には、特に注意を要することになり、昔は鬼門除けとしては、其方角に社寺などを建てたものだ一例を申せば、京都の皇城には、比叡山延暦寺が建てられてゐる。江戸城では、之に擬して、東叡山寛永寺がたてられた。我佐嘉城では、萬部島があり、宗龍寺がある鬼門の反対の方角、即西南隅を裏鬼門といふ。家など建るには、鬼門裏鬼門には、出入口、便所、その他不潔の場所を置くことを忌む出入口は、東南がよいと云ってある。

さて、小城城、実は館で、今の県立小城中学校舎の所在地が、昔の館のあつた所である。此館の正門、即ち出入口は館から東南に当る、今の松屋旅館前の石橋内にあって、結構な位置である。館の鬼門は今の県立小城高等女学校敷地の東北隅に当るので、維新前までは、此処に鳥森稲荷社があり、其東の道路を隔てて、護摩堂即ち御祈禱所があつた。此護摩堂と、稲荷社が、小城城の鬼門除けで、直茂公が愛孫元茂公の為に、自ら御指図なさって出来たもの、と言ひ傳へられてゐる。護摩は梵語「ホマ」の音訳で、真言天台の如き宗旨では、諸の罪悪を焼きつくす趣意で行ふ一種の祈禱である。



白い部分が館敷地で、鬼門の所に稲荷社がある（小城北郷図）

鳥森稲荷社は、元は今の桜岡公園、即ち昔の御山にあったのを移つされたので、維新になって、復た元との御山即ち現在の社に還原された。梧竹翁の退筆塚も社地の一部にあつたが、移社と同時に、天山閣の南なる現在の処に移った護摩堂には、大きな立派な隕石が二ツあつた。一は英政府の懇望で寄贈せられ、今は大英博物館に陳列されてゐる筈だ、一ツは鍋島子爵邸に秘蔵されてゐる。二ツ共小城町附近に落下したのを、掘出したものである。

此堂では、古来柵機あげが行はれてゐた。今の鍋島八郎サンの何代前かの御方が、非常に絵画が、ご上手であつた。此方が丹誠をこらして、極彩色に描かれた七夕図を掛けらるる例であった。

此図は多分子爵家に宝蔵されてゐるであらう、実に天下の逸品と云はれたものだ。又堂内に磁製の花瓶があつた。これは蓮池の雲叟公が一見して非常にご所望にあったので、公に贈られたとか貸されたとかいふことで、今尚ほ蓮池の御邸にありと申されている。護摩堂の境内、報時に鐘楼があつた。菅井の御邸が焼けたとき、此鐘が特に洪音を発して、市民に警告したと云はれている。

現に桜岡公園にある報時鐘は、即ち是れで、直茂公御幼少の時、鋳造せられ公は侍臣に手を引かれながら、熔銅内に大金塊を投ぜられたといふ話が残っている。

稲荷社と護摩堂との間の通路は北小路に出るもので西側には桜樹を列植せられ、花時には花の「トンネル」が出来て、その美観は何とも言はれなかつた、依て桜洞と呼ばれていたと、古老の人々は、自慢話に花を咲せている。一寸した一部の土地でも、其変遷をたずねて見るとGeographie-histoirique として面白い話の種があるのである。昭和九年五月

佐賀郷友（桜陰慢録）

牛頭城

叛臣奸計乱人倫
尺布羅縫骨肉親
這裡敗興天数在
旧城重領牛頭城
角の火も
ふりにし里のことひ牛
今年なき世は
静なりけり

（西肥古蹟詠）

祇園川観螢

董風一夕出柴
吟走祇園杜若汀
草螢千點欺珠玉
半散中天作列星

（蕪　詩）

題字は佐賀県立小城高等学校長円城寺大麓氏

牛尾神社に伝わる 広鋒銅戈（下）

その時代的背景

木下　巧

弥生時代の中期を過ぎると、狭鋒の銅利器の出現は跡を絶ち、鉄才[注1]や鉄剣[注2]などの鉄製品の出現をみるのである。

鉄器の伝播はこれまでの青銅器文化を駆逐し、農業、工業の産業を飛躍的に発展させ、同時にまたこれは戦闘力をも倍加したのである。つまり、戦闘用具としての鉄製品の出現が、実戦用としての狭鋒銅利器を終末へと追い込んだのである。

と同時に、大陸等に類例をみない青銅製品――銅鏃、銅釧や巴形銅器などが、この時代から吾が国に出土していることは、吾が国においてそれらが鋳造せられたことを意味する。広鋒銅戈等例外ではない。即ち、神崎郡東背振村西石動、佐賀市久保泉町櫟木出土の広鋒銅戈の鎔范（鋳型）の出土はこれを実証するのである。

青銅利器の鋳造はじまる

広鋒銅戈が吾が国で鋳造せられたことは事実であるが、問題が残る。つまり、前代の富有な豪族のみが所有した舶載の青銅利器は、彼等の所謂、所有物として彼の死とともに副葬されていた。だが、広鋒銅戈等は墳墓の副葬品としては出土しない。墳墓とはおよそ関係のない場所から発見されるのが常である。一本または数本、あるいは十数本が互いにさしちがいの様相を呈して埋められている。[注3]

これらのことは、広鋒銅戈等が豪族の個人所有物ではないと考えられる。もし、そうでないとするならば、族長の所有物として原始時代の根強い因習は伝統的にその墳墓に埋葬されなければならないその強い伝統を打ち破る程大な力をもっていたのは鉄以外にはないであろう。実戦を伴わない広鋒銅戈等は、もはや豪族等にはその必要性がなく、実利的な鉄器を必要としたのである。

呪力をもった広鋒銅戈

再生されて粗悪になった青銅、そして型態的に実戦用としての機能を失った銅戈等が、何故に生産られねばならなかったのであろうか。ここで考えられることは、銅戈等が当地において生産できる技術が流布したからである。しかし生産された〝もの〟に意味がなければ、生産はあり得ない。

前代までは実戦用の利器であると同時に、それは権威のシンボルであり、マジシャンの意味もあった。広鋒銅戈は、鉄器の動入により実戦用利器としての意味は失ったが、マジシャン的要素が依然として根強く伝統的に継承されたと考えられよう。

日本書紀巻一神代上[注4]に「天神、伊奘諾尊・伊奘再尊に謂りて曰はく、「豊葦原の千五秋の瑞穂の地有り。汝往きて脩すべし」とのたまひて、すなわち、天瓊戈（あまのぬほこ）を賜ふ。是に、二の神天上浮橋に立たして、戈を投して地を求む。因りてそう海を畫して引き拳ぐるときに即ち戈の鋒より垂り落つる潮、結りて嶋と為る」と、戈を〝ほこ〟と呼んでいる。また、「伊奘諾尊・伊奘再尊、天浮橋の上に立たして、共に計りて曰はく「底下に豈国無けむや」とのたまひて、すなはち、天之瓊矛（あまのぬほこ）をもって指し下して採る」とある。古事記上巻に[注5]も同じく「是に天つ神諸の命以ちて伊邪邦岐命、伊邪美命、二柱の神に『是の多陀用幣流国を修り固めなせ』と詔りて、天の詔矛（あまのぬほこ）を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の詔矛を指し下ろして畫きたまへば、塩許々袁々呂々邇畫き鳴して引さあげたまふ時其の矛の末より垂り落つる塩、累なり積りて嶋となりき」とある。

いづれも〝あまのぬほこ〟であって、〝あまの〟は、天上界のものを尊いとする思想からの美称で、〝ぬほこ〟は玉で飾ったホコである。ともあれ、ホコ（戈・矛）による国産み、国を得る神話となったものであろう。同じく「猨女君の遠祖天鈿女命、則ち、手に茅纏の矟（ちまきのほこ）をもち、天石窟戸の前に立たして巧に作排優す」とあり、隠れてしまった天照大神（太陽）に或る活力を与えようと、天鈿女命が大勢の人々を笑わすような仕草を、茅を巻いた大きなホコをもってなしたというのである。

祭祀具として共同体で管理

このように「あまのぬほこ」「ちまきのほこ」あるいは「日矛」として、紀記等に表現されているように、「ホコ」のもつ呪力が考えられる。

その呪力をもつ「ホコ」所謂、祭祀具の一つとして使用せられたのである。そして、その願い――神への祈願がなされた場所に祈願成就を祈念して地下に埋められたものであろう。

そして、後世神社の型態が出現するに及んで、祭のホコとして、あるいはホコが刀剣がそこに奉納されていくのである。

このことから、これらのホコは豪族一人の所有物ではなく、その地域――くにの共同体の管理下にあったと解釈されよう。

ここに紹介した牛尾神社の広鋒銅戈2口は、昭和初年社殿改築の際に発見されたもので、それの由来を知る由もないが、氏子による奉納と思われる。

これらの銅戈は、古代人のどのような願いがこめられているのであろうか。

そして、広鋒の青銅利器を作った技術は、後世の「鏡作部」として活躍していくことになるのである。

（注1）中山平次郎「筑前国朝倉郡福田村平塚字栗山新発掘の甕棺内遺物」考古学雑誌十五―四

（注2）九州考古学会「九州古文化図鑑」
中山平次郎「クリス形鉄剣及び漢式鏡の新資料」考古学雑誌十七―七など。

（注3）畿内を中心に分布する銅鐸の出土もこれと同じゅうしている。

（注4）坂本太郎他「日本書紀上」日本古典文学大系　岩波書店

（注5）倉野憲司他「古事記祝詞」日本古典文学大系　岩波書店

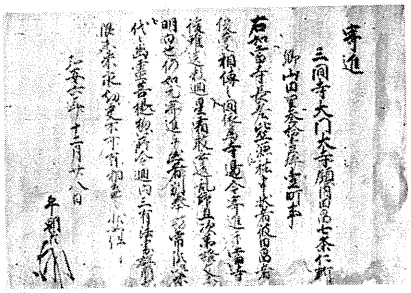
（小城町下岡小路在住）

鎌倉時代における

千葉氏の動向について

中世の小城の歴史をひもどこうとする場合、千葉氏のことについてふれなければ、十分にその意を尽せない。ところが千葉氏に関するまとまった史料はまったく存在せず、散見する史料からその様子を知ろうとすることは容易なことではない。筆者の眼にふれた史料によって、特に鎌倉時代から建武新政の頃までの千葉氏の動向について述べることにしたい。

千葉氏は桓武平氏の出と称し、下総国（現・千葉県一帯）に一大勢力をもった豪族である。千葉常胤は、治承四年（一一八〇）源頼朝が伊豆蛭ケ島で旗上げをし、石橋山で敗戦した時、三百騎余の兵を率いて頼朝に参援し頼朝のむつかしい一時期に大きな力となったことは『東鑑』などの史書が明確に認めているところである。



平朝臣寄進状（円通寺蔵）

千葉常胤が小城郡内に所領を得たのが何時のことか分明ではないしかし、治承四年の功によって恩賞として、下総千葉のほかに平氏の支配下にあった九州に土地を与えられたと考えて悪くなかろう。文治二年（一一八六）に、千葉常胤は薩摩国五か郡の地頭職を受けたことがあり、大体同時期に小城地方の土地を受けたのではないであろうか。『元茂公御年譜』には晴気庄を所領として得たとしているが、福岡県の宗像神社に保存されている『宗像神社文書』によれば、晴気庄の地頭職が宗像大宮司にあつたことが確証され、宗像大宮司と晴気庄内の荘官が年貢について論争していることなどの事情が知られる。至徳三年（一三八六）八月二十三日付の「今川了俊施行状」によれば、肥前国晴気庄は宗像大宮司氏頼相伝の所領であるので、違乱がないように千葉介に命じている。これによって、晴気庄は宗像大宮司の所領であり、千葉氏は晴気庄をも含む小城一帯の支配に当っていたものと考えられる。当時、守護大名および土豪による庄園侵略がすすんでいた時点で、千葉氏もその類にもれず宗像大宮司の庄園晴気庄の侵略を度々行なっていたのが、九州探題今川了俊の力によって停止を命じられたものであろう。

文永八年（一二七一）鎌倉幕府は鎮西に所領を持つ御家人を鎮西に下向させ、蒙古の来襲に備えさせた。この時千葉氏も下向したらしく『徳島系図』に含まれている「千葉系図」によれば、千葉頼胤が文永の役に参加し、戦傷のため建治元年（一二七五）八月十五日に小城で没したことが記されている。頼胤は常胤の四代の孫で、千葉氏が小城に下向した最初であるといわれる。おそらくこれまでの千葉氏の小城地方の支配は代官によって行なわれていたであろう。頼胤の子の代で千葉氏は関東千葉と九州千葉に分かれ、宗胤が九州千葉の最初になったといわれる。宗胤は前掲の「千葉系図」では三間山円通寺の開基と記され、『歴代鎮西要略』によれば、円通寺は弘安元年（一二七八）に若訥宏弁によって再興されており、頼胤が文永の役の戦傷で小城に没した後父にかわって蒙古の来襲にそなえて鎮西に下向していたもののようである。しかし実際には下向し小城に常住したとは思えない。千葉氏の小城常住のための下向は、千葉胤貞まで待たねばなるまい。なお、宗胤が発行した文書で今日残っているものは、『円通寺文書』の中にふくまれている。弘安六年（一二八三）十二月二十八日付の「平朝臣寄進状」がある。この平朝臣とは宗胤のことではないかと佐賀大学の三好不二雄教授は指てきしておられる。また『松浦山代文書』の中に正応元年（一二八八）九月七日付の「関東御教書」があり、千葉太郎宗胤代行蓮という文字が使われているのは、宗胤が小城支配のため代官として某行蓮をおいていたことを示すものであろう。宗胤は前掲「千葉系図」によれば、永仁三年（一二九五）正月十六日になくなっている。そのあとをつぐのが祇園山挽をはじめたという千葉大隅守胤貞である。胤貞の小城下向説は、普通建武元年（一三三四）説がとなえられているが（『小城郡誌』『北肥戦誌』『歴代鎮西要略』など）、天明七年（一七八七）書出の『法華宗由緒』によれば、正和五年（一三一六）十二月二十六日に小城に下向したと記している。ところが『河上実相院文書』の中に含まれている建武四年四月日付の「田中行祐申状」に……去年故殿（千葉胤貞）鎮西御下向之時……とあるのは注目すべきである。胤貞の鎮西下向を建武三年とする有力な史料であるが、これが最初の下向をさしているかどうかは明確ではない『光勝寺文書』の中には正中元年（一三二四）十月十三日付の「胤貞置文」と元徳三年（一三三一）九月四日付の「胤貞譲状」があるこれらのことから類推すれば、胤貞は父宗胤がなくなったあと正和五年頃に小城に下向し、文保年間に松尾山光勝寺を開創し、下総中山法華経寺の日祐上人を開山とした。その後、鎌倉幕府の滅亡、建武新政府の樹立というめまぐるしい世の中の変化の中に本貫の下総にもどっていたが、足利尊氏が建武三年西走するのに同行し、多々良浜の戦に参加し、尊氏東上と共にそれにも同行し、兵庫和田御崎の合戦に参加し（前掲「田中行祐申状」による）、前掲「千葉系図」によればその年の十一月二十九日に死去しているように考えられる。この後、すなわち胤貞の子胤泰の代から千葉氏は小城に常住し下総千葉との関係をうすくし小城・佐賀・杵島三郡に勢力を伸長させていくことになる。

千葉胤貞の墓（光勝寺境内）

西小路在住
岩松要輔稿

末の幕士の志

祇園太郎

祇園太郎、本名は古賀利渉。三里西川の大庄屋に生まる。藩校興士譲館に学び、後に大野梁村に師事す。安政五年、脱藩して勤皇の志の奔走し、真木和泉、河野鉄兜、枝吉神陽、江藤新平、大木民平（喬任）、副島種臣、桂小五郎等の志士と交わるという。特に少将正親町公董のもとに活躍すること目ざましきものあり。しかし慶応二年（一八六六）雄志を懐いて病に没す。時に三十四才になり。没後五十年にあたり某新聞に十四回にわたって連載されし、祇園太郎の伝記をここに三回にわたって翻刻す。三里門前、清浄院住職納富慶邦氏と北島善次氏のご高配により資料が公開されたことを記し二氏に厚謝す。（編集子）

我が佐賀藩は維新の鴻業を翼賛したる四大強藩の一に属し、鍋島閑叟公を始め大隈重信、副島種臣江藤新平、大木喬任等と諸名流は政府の要路に立つ事となつた。然かも佐賀藩の諸名流が動もすればすなわち客卿たるの観ありて主動者たるを得ざりしは、嘉安以来帝国内に風雲を捲き起し、いやしくも気概あり力量ある雄藩なりせば其の風雲に乗ずべき機会は甚だ乏しからざりしにかかわらず、佐賀藩は日和を見定めて後、動かんとするの状無き能はざりし為、薩長上に対しては雁行たるを免れぬのであつた。

然れば流石の大隈伯も余をして薩の西郷の如く、土の後藤の如く一藩を代表して志士の間に周施するを得せしめたらんには、決して人後には落ちざらんものをとの歎を発せしめたる所以である。

参道から清浄院【小城町門前】をのぞむ
当院に祇園太郎の墓があり
北隣が竹林居である

然り佐賀藩が維新風雲の機会に乗ずべくして稍々立ち後れの遺憾ありしは事実である。随って佐賀本藩を始め各支藩の士にして京坂の地に到り当時の志士と交を訂し尊王攘夷を唱えて活発々地の運動を試みたるは、寥々晨星の如くで僅に佐賀藩の江藤新平、中野方蔵及び鹿島藩の八沢禎之進等の数氏を算するに過ぎぬ。然るにつとに安政年間に於いて脱藩し、公卿志士の間に周施し勤王の志を致せし者は小城藩の志士祇園太郎氏是れである。

斯の人の小伝は故田中清風氏が生存せる明治二十四年、新聞に掲載して江湖に紹介せられたと聞く大正五年祇園太郎氏が没後五十年に相当の砌り、其の遺子たる岡利貞氏に依りて五十回忌が営まれた仏事を執り行いしは小城町門前なる禅刹清浄院であった。

法筵に列するは利貞氏及び竹林居（祇園太郎の居）の当主金丸林三郎氏及び其の他親戚故旧二十余名

同禅刹は晴気川の流を帯び、牛尾山脈の翠巒を負い、尚太古朴茂の美を存する山里の清浄境で、方域の墳墓中に屹立する白皚々たる豊碑は、英雄を祀れる標識である。

頓って同寺住職及び三岳寺の古賀広道（先住）長老等の誦経と梵唄とは、折柄の春雨に打ち濡り堂前堂後に万竿の碧浪杆叢生し、一株の海棠今を盛りに咲き綻ぶるなど風情深し。焼香終りて斎食に就き遺物遺書を展覧したのである。請う、吾儕をして五十年の其の人を喚起し、其の悌を忍ばしめた。

●氏の本姓名

祇園太郎の名は維新前後に於いて天下志士の間に知られたるも、其の実祇園太郎とは変名であって本姓は古賀利渉。幼名は源太郎、通称は広助、雅号を牧山と云うのであった。天保四年十二月を以って肥前国小城郡三里村門前たる竹林居に於いて呱々の声を揚げたのである。

●代々大庄屋

氏の家は其の系譜を聞漏らせしも千葉氏以来の郷士にして、鍋島氏に至りても東郷西郷の二郷を管轄する大庄屋の家柄にして代々其の職に居り、小城藩よりは徒士の資格を与えられて居たれば、累世の大庄屋として資産も乏しからず随って家に使用する奴婢も数多く同地方第一の旧家として郷党の尊敬浅からず、氏は此の如き家庭に成長したのである。

●学問と家業

氏は幼より学問を好み、成童前後に於いて既に蔚然頭角を露し、更に藩学に入り研鑽怠らざりし為学業大いに進む、尚自ら足れりとせず、当時蓮池藩の碩学に其の人ありと称せられたる大野梁村翁に就いて経史を学び、殊に春秋、左氏伝は其の最も精通する所なりしと。右大野梁村翁は現任遠信大臣武富時敏氏の外祖父である。氏は比の如く漢籍の造詣深きが上に国

小城名所めぐり小唄

●印は京都と同じ地名

一、小城はよいとこ
　肥前の京都
二、いこかまいろう
　名所の小城へ
　仲も吉田の　ふたりづれ
　（以下ハヤシ略）
三、螢の名所は
　祇園の川よ
　泣かぬ恋路に　身をこがす
四、須賀の社は
　山ひき祇園
　お国自慢の　山の鉾
五、千葉の城あと
　昔を偲び
　はやも北浦　太追場
六、口説き口説かれ
　うつつの内に
七、夫婦のえんも
　えんの清水　観世音
八、うれしはづかし
　早や結ばれて
　共に瀧うけ　願成就
　ふなれの世帯

風も其の師を択みて学びしかば、其の和歌の感吟するに堪えたるもの多きは世に聞こえて居る。かくて氏は二十五歳にして其の厳君より家督を譲られたれば、東西二郷の大庄屋を襲ぎ、一切の荘務を処理し、事に幹たるの才を示し居たのである。

●藩庁の注目

鎖国主義の下に閑眠を貪り居たる日本帝国も、一たび外国の為に刺激せられてより尊王攘夷の志士は慨然として奮起し、国内は紛然騒然たると共に有為の志が乗すべき風雲の会を捲き起し、嘉永より安政に亘りて最も其の然るを認めるのであった。気慨あり才幹あり学問あり抱負ある氏が争でか此の千秋一会の好機を等閑視すべき。屢次小城藩の当局者に就て時事を切言し、藩内の向背を定めて以て大義の天下に伸ぶべきは最も急務なるを論じた。然かも大声は俚耳に入らず、俊傑の卓説は俗吏の為に喜ばれざるは古今東西其の揆を一にすれば、氏が折角の痛言も何等の反響も無きのみか、却て藩庁の為に注目せらるるに至りし、事志と齟齬するの歎を発せしめたのである。

●割腹の勧告

氏は時勢の進展するを見て、胸中悶々の情に耐えず彼の藩庁俗吏輩の注目する所と為り居ることはつとに覚知せざる事はあらざるも耿々たる一片の赤心は己まんと欲して己む能はざりしより、時に危激の言議を試み当時者を冒し、幾回か忌憚に触るる事があった。斯くて安政五年八月、氏が邸宅なる竹林居を訪れ来れるは三名の藩士であった。彼等は寒暄の挨拶を終るや終らざるに短刀直入、氏に割腹を勧告したのである。其の言条は氏が藩の門閥家某に対してなしたる言動は無礼を極めたれば、藩庁は決して黙過すべくもあらず、必ず相当の罪科に行わるべし。然れば我々は友誼上より割腹を勧告するなりと云うのであった。

●遂に脱藩す

若し彼等が勧告に従わず抗争せんか、刀に掛けても遂行せしめんとする意気込みであった這はひっ竟彼等三士は藩庁の内命を含み、名を友誼上の勧告に仮り、氏を亡きものにせんとの底意に外ならずと読まれたのである。烱眼の太郎氏が奚んぞ此の間の消息を解せざるべき、其の抗争するの不可なるを思うや、謹みて勧告に従うべき旨を告げ、就ては暫時の猶予を得たしとて彼等を別室に移し、独り心に歎すらく、縦令我に罪ありとするも決して死する事程の事にもあらず。然るに権門の憎悪受くるが為に命を失わんは愚も甚し、寧ろ脱藩して此の場の危難を免かれ異日大に為す所あらんと決心し、倉皇結束して旅装を整え、

旗竿に伐るや此時我園の
竹のむら立伐るや此時
父母は我が行方を
知らぬ火の
燃る思ひに身を焦す覧

との和歌二首を留め、行衛何処と不知火の心、筑紫の甲斐あらしめんと雄々しくも其の場を逐天したのである。

●鉄兜に添書

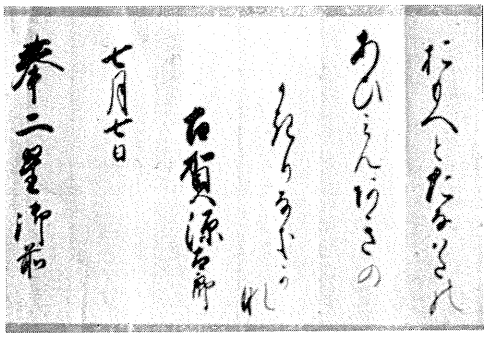
祇園太郎の竹林居を逐天するや先ず其の師大野梁村翁を蓮池に訪い、具に事情を告げたのである。翁聞いて其の志を壮なりとし、贐するには一口の利刀を以てし、且つ播州の儒士河野鉄兜に頼るべしと添書を与えられたのである。

此の河野鉄兜と云えるは、其の頃有名の人にして、気節あり学問あり殊に詩を善くせしが、曾て筆を載せて佐賀に遊び、時の諸名流と唱和応酬し、枝吉神陽の為人に敬服したるも此時なりと云えば、大野梁村翁も鉄兜と親交を結び居られたと思われ、随て梁翁門下の志士祇園太郎の前途を托すべきは斯の人なりと思われたからである

（以下次号）

祇園太郎の碑（清浄院境内）

碑文「祇園太郎の碑正二位伯爵通禧書」とある。その下に「大源斉学道広文居士」とあり子孫の岡利貞氏の謹誌がある



祇園太郎自筆七夕詠歌

火災よけよと　八天社
九、お産たやすく
子宝賜まへ
祈る江里山　観世音
十、虎の御前の　操にほれて
ちぎりも堅たく　岩蔵寺
十一、仏の加護を
松尾の寺よ
由緒輝く　光勝寺
十二、夙に知られた
桜ケ岡よ
物いう花まで　桜いろ
十三、神のみそのは
岡山やしろ
浮世ばなれの　絵のすがた
十四、小域の名物
羊羹おこし
紙や素麺　手土産に

作詩者・在長崎
村山亀吉
（小城町出身）

注、この小唄は「佐賀郷友」（昭和十五年五月号）に掲載されたものである。

永田武次郎海軍大尉の手紙

旅順港外で戦死

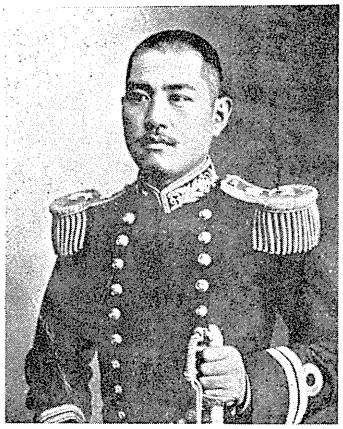
日露戦争の勇士

岩松要輔

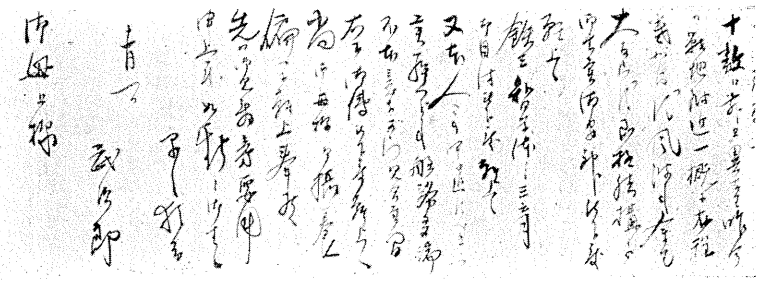
永田武次郎という人物について昭和十五年生れの私にはまったく知るよしもなかった。ところが一年程前図書館で『軍人亀鑑永田大尉伝』という本を見つけた発行は明治三十八年、編者は『肥前国誌』の著者である森周造、発行人は永田大尉の弟永田鉄三、発行所は小城町積善堂松崎武三。この本を読むにつれて大尉の出身が小城であること、二十六才で戦死する時まで母親に宛てて書かれた数通の手紙類にあらわれた人間性などに強く引かれるものを感じた。

日露戦争の是非論が数年前は盛んであったが、当時の一国民、一軍人であった大尉の手紙の中に、その当時の国民感情、軍人としての決心というものがそのまま写しだされていて興味深い。また母親兄弟親族に対する思いやり、考え方などが現代人として味わい、反省すべき点を含んでいるように思われる。

今年の五月末に大尉の遺族のご子孫のお宅を訪問したところ、一つの桐箱に保管されている大尉の手紙三通（明治三十七年七月九日付、十月二十九日付、十一月一日付）東郷平八郎海軍大将（明治三十八年当時）の書状、大尉の位階官位昇進の書類、葬儀の時の弔詞墓石の題字、裏面の碑文の原稿などを見せていただいた。特に大尉の手紙を読ませてもらった時にはある感動さえ感じた。ここに三通の手紙の全文を掲載することは字数に限りがあって出来ないので、その内の一通（写真参照）を全文掲載し、他二通は一部分を抜粋掲載することにしたい。他の資料の紹介は別の機会に譲りたい。その前に大尉の略歴を紹介しょう。



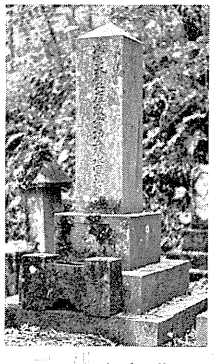
永田武次郎大尉



明治37年11月1日付の手紙の後半の部分

永田大尉は、明治十二年四月十日、永田鉄男（剣道師範）を父として小城で生まれた。桜岡小学校勧興小学校、佐賀県尋常中学校を経て、明治二十九年海軍兵学校に入学し、三十二年卒業した。卒業と同時に少尉候補生として軍艦比叡に乗込み、中国北部で起っていた義和団の乱鎮圧に参加した。三十四年に軍艦浅間乗組となり、舞鶴水雷艇隊付となり水雷艇畑にはいることになった。三十五年中尉に任官。三十六年軍艦千代田乗組となり、翌三十七年日露戦争勃発と共に仁川沖の海戦に参加。同年五月第三回旅順港閉塞隊員として、江戸丸に乗組み出撃、指揮官高柳直夫少佐戦死により代って指揮をとり任務を遂行無事帰還。同年七月大尉に昇進した。同年十月二十九日水雷艇第五十三号艇乗組となり、十二月十四日露艦「セバストポリ」夜間雷撃に出撃し、激戦中に行衛不明となる。葬儀は翌三十八年二月二十七日三間山円通寺で盛大に行なわれ、三日月町藤折の持福寺の境内に埋葬された。墓碑の題字は東郷平八郎の筆である。大尉の遺書により、晴気尋常小学校と県立小城中学校へ各五十円、桜岡小学校と組合立小城高校小学校へ各四十円ずつを奨学金として寄附された。

持福寺は大地町のバス停留所から北へ五〜六百米の所にある。永田武次郎大尉の墓は兄小太郎氏の墓石と並んで、永田家歴代の墓に囲まれて東を向いて立っている。向って右側には父母永田鉄男夫妻の墓がある。（以下次号）



永田武次郎墓

小城にある鳥獣供養塔

藩政時代には各地において鳥獣等の供養塔が建てられている小城においても通称「ししん塔」（猪鹿塔）という、猟で捕獲された「猪」の霊をとむらう供養塔が三件知られている。

一つは岩松地区の二瀬川にありあと二つは晴田地区の平原にある。二瀬川のほうの碑文は「亨和元辛酉歳首夏日、猪鹿一百余供養」とある。平原のほうは一つは「猪鹿一百亨保十二年丁未孟夏日、二百元文三戊午孟冬日、供養」とあり、もう一つは「宝暦十三癸未年夏猪鹿三百供養」とある。時代的には二瀬川のほうが一番新しい。

二瀬川の猪鹿塔

小城町産業の発展あれこれ

深川　栄治

頃は幕末、弘道館教授の久米太一郎（邦武文博）は閑叟公から次男欽八郎（直虎）の教育を命ぜられ佐嘉から月一回は小城へ出張していた。

近侍には中林彦四郎（梧竹）や江越礼太（如心）らがおり、老公は観世流能の名人であり、夜は大いに談論風発したらしい。尚久米博士は歴史殊に古文書学の権戒であり、佐賀県関係の古文書を広く発掘され、子息桂一郎は洋画の先駆者として有名である。

英国へ脱出遊学していた石丸虎五郎（安世）は、後に電信頭、造幣局長となったが、戊辰之役の最中に帰朝した。当時長崎にいた久米江越等と協議して、軍用石炭の需要が増大したので、英人モーリスを雇い山代郷に竪坑を開いて洋式採炭を行った。元小城藩山代郡令の梅崎源太郎は、久原の私宅を提供したので江越先生を長とし経綸舎を開き、石丸は英学を教えた

この塾には中野宗宏、初子兄弟多久から志田林三郎、長崎から巨智部忠承等が学び、後に彼等は電気工学の草分けとなり、我国産業発達に貢献した事は特記すべきである。

石丸、江越両先生は明治三年有田焼きの改良のため科学者ワグネルを招き、江越は後に白川小学校有田工業の創立者となり、有田焼の技術指導子弟の教育に尽され墓碑には直虎額久米撰、梧竹書がある。

また、柴田花守の子、納富介次郎は窯業技術者で、帰朝後は同じく有田焼の改良にあたり、有田工業校長となった。

明治五年には西川の石工、江頭吉三、山本弥七、平川卯三外十名ばかりは、東京煉瓦台（官営工場か）の建設工事に出稼したが、生活費を一銭も送らないので、留守家族から戸長役場へ嘆願書を出している。当時は送金方法がなく為替取組がなかっただろうし、作業の内容は解らないが、選ばれて新日本建設の一端を荷負うたことは意義深いと思う。

旧藩御用の八百屋惣吉が羊羹製造をはじめたのも此頃で、日清、日露戦に酒保用品として歓迎され同業者もふえ今日の「小城羊羹」として名声を高めた。

第九十七国立銀行は通称「殿様銀行」であり、卅年頃岸川、宮副野村、田中丸等の商人資本が、経営参加したが、国立銀行は満期解散した。卅二年合資会社小城銀行へ改組し、鍋島家経営に復した。殿様銀行に反発して小城共済銀行（頭取西正豊）岸川家の伊万里実業銀行が設立された。岡山神社境内に第九十七国立銀行株主中より献納した石鳥居と手洗がある。

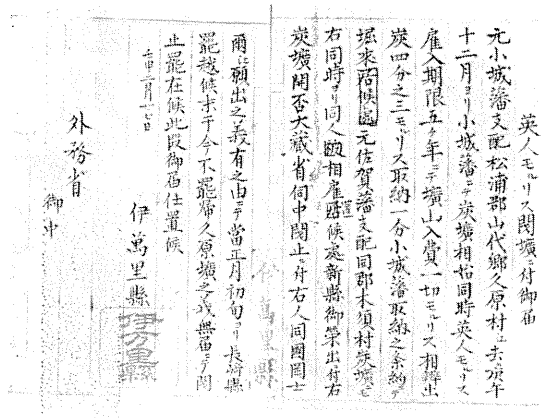
和紙製造が漸次衰微しかけた明治廿年項、小柳平三郎、増田神三は筑後から教師を召き、技術を伝習させ、業者には原料、資金を貸与して業界の発展に尽された。後年当町から海外へ進出し紙商として多くの成功者を輩出させたが如何んせん敗戦となってしまった。

素麺製造も素麺改良会社があり明治年間は盛衰はあったが、白髪素麺、高原素麺として盛んであったが、時代の変遷、食生活の変化に廃業し羊羹製造へ転職した者が多い。

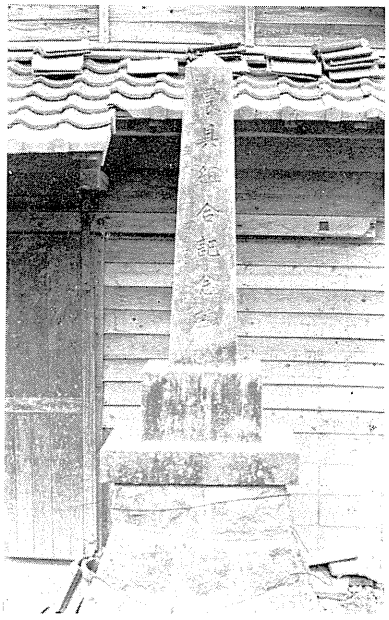
明治廿一年より晴田村長であった土山文九郎は卅三年晴田農具組合を作り、農具の改善発展に尽し野村竹次郎は製糸工場、煙草元売捌として努めたが、これまた時代の波には勝てず、在来産業は全く痕跡もとどめない。

小城の特産であった和紙、素麺蚕糸、農具、臘等の在来産業が全滅したのに比し、小城羊羹として名声を高め、蜜柑増産の昨今であるが、どうして当町に近代産業が育成発展しないか反省すべきであろうし、町当局にて企画中のマスタープランを吟味し、明るい住みよい町づくりに期待しよう。

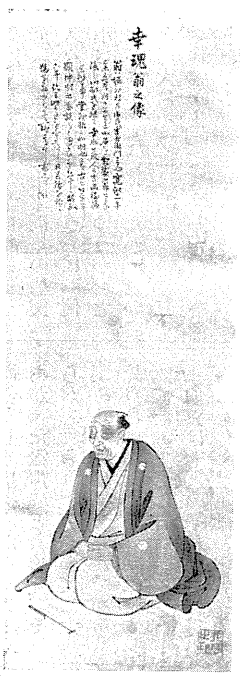
（小城町上町在住）


英人モルリス閉鉱ニ付御届
元小城藩支配松浦郡山代郷久原村ニ去ル巳年十二月ヨリ小城藩ニテ炭坑相拓同時英人モーリス雇入期限五ヶ年ニテ坑山入費一切モーリス相弁出炭四分之三モーリス取納一分小城藩取納之条約ニテ堀来西洋風元佐賀藩支配同郡木須村炭坑ヲ右同時ヨリ同人ヨリ相雇ヒ候處新県御管内ニ付右炭坑開否大蔵省伺中間止ニ付右人同国国士爾頼出之義有之由ニテ当正月初旬ヨリ長崎県罷越候ヨリ今ヨリ罷帰久原坑之儀無留ニテ閉止罷在候此段御届仕置候
申二月一日　伊万里縣
外務省御中

英人モルリス閉鉱につき御届（県立図書館蔵）



農具組合記念碑　（小城町晴田）
大正12年12月15日建立



△新資料発見△

今まで柴田花守自画像といわれていたものが、旧佐賀藩士有田家蔵蔵の左の掛軸によって、堀江村（三日月町）出身の占師副島幸助（幸魂翁）肖像であることがわかった。次号に詳記する。（岩松記）

寺小屋の賦

原　正勇

郷土史で「譜」でなく、「賦」とすることにいささかのためらいもあるがあえて「賦」として、明治初年の小学校教育、それも名もない水呑み百姓の人間の賦（詩）をこの短い一編に綴ってみようと思う。

明治四年廃藩置県、文明開化への胎動は、いち早く文部省が生れわが佐賀の江藤新平は文部大輔（次官）その後を継いだのも全じ佐賀の大木喬任で司法卿から文部卿（大官）となっている。

しかし、学制は布かれても、七才から就学と決められてはいても末端の地方村落の貧しい水呑み百姓には、授業料まで出して学問させてもどうなるものではないし、いやはっきり言えば貧しかった。

明治五年県庁から文部省に報告されている資料をみると、県全体の小中学校の生徒総数が、なんと八九一人である。幕末時代は、藩校（小城藩では興譲館）・塾・寺小屋の三段階あって一般庶民の寺小屋は佐賀・唐津両藩で四七〇校ほどあったらしい。現在県下の小中校数は二八二校である。

わたくしの伯父に富吉という名もない大工がありました。一昨年（昭四二）九十才で亡くなりましたから、明治十年生れで明治大正昭和の三代を生きてきたわけであります。富吉の父も大工の頭梁で水車大工として大勢の弟子を使い一代で産をなしていました。

「晴気荘」といえば歴史では西千葉城（晴気城）を中心に太宰府の古文書にも出ている栄枯盛衰の夢を秘めている村ですが、明治大正ごろの晴気は、谷内三百戸足らずの寒村で耕地も乏しく外部に依存せねば生きて行けません。従って手製の藤かずらで作った篩や箕の農具を担いで九州一円を股にかけて売り歩いています。

しかし明治の初めごろは、晴気川には十いくつかの水車がかかっていて、下流の白石平野（芦刈砥川白石）の穀倉地帯から精米製粉の車馬の列がひきも切らずに上ってきました。この水車大工でしたその一人息子の富吉少年に、当時村からは十人に一人も行っていない学校に行けとの厳命で初めはしぶしぶ通っていましたが、さまで学校嫌いでもなく、あるとき「うむ、これはよく書けとるぞ」と褒められてからは字を書くことが大好きになってゆきました。

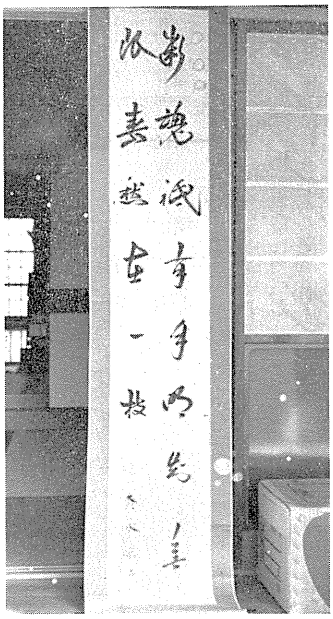
十才のとき、年に一度の「席書会」に富吉少年は選ばれました。各部落代表の選手が学校に集まりそれぞれ講堂に陣取って筆を振うのです。両親はもとより部落の親戚有志まで酒肴の弁当持参で応援に来て、「それ行け、それ行け、頑張れ、頑張れ」と声援する中を少年選手たちは「エイ、エイ」と声をあげて一生懸命に書いてゆきます。

「断魂祇有月明知無限春愁在一枝」これが十才の富吉少年にその時あたえられた課題でした。みなさん読んでみて下さい。

わたくしは、ずっと他県に勤めていて、帰省のときたまに伯父を見舞うくらいでしたが亡くなる一年前（昭四一）九十才近くの伯父と久々に対談しているうちに「俺の小さい時の書ば見しゆうか」と気嫌がよかった。「みたか」というと、大事そうに単筒の底から三本の巻物を出してきました。「書」というから半紙ぐらいのものかと思っていた私はびっくりしました。障子紙を縦に二枚つないだ十尺（三メートル）ぐらいもの紙に中字二行で十四字書いてあります伯父はニコニコしながら、「まるが三つついているだろう」と申します。なるほど右上に朱のまる三つがついています。ほのかに薄くなった美しい朱色です。私は川端康成の代表作「千羽鶴」の志野の抹茶茶碗のふちに、文子の母の口紅がしみて、「ひとところがぼうとしている」といった、あの名作の描写場面の色を思い出すともなくふっと思い起していました。そんなことには頓着なく伯父はこう説明してくれました。

講堂の板壁に出来上った作品が張られると、よその村の先生（この時は三里村の納富先生）が来てまず　○を一つつける。つかないのは落選である。そのついたものに、また○がつけられ半分となるこうして残った二つのまるのついた作品の中から最後の三つまるがつけられる。これが第一席の優勝作品である。伯父はこの三つまるの作品三点を、八十年もの長い間晴れの試合で優勝したよろこび、両親はじめ応援者からワアーッとあがった歓声のどよめき、それからが忘れられずに心の奥に大事に秘められて続いてきたであろうと思うと、わたくしの胸はジーンと熱くなってきました。

伯父は七人の子を持ち、長男から二人も大阪の医大を卒業させるため、家も山も人手に渡し、水車も衰え大工をやめ、しがない饅頭屋などやったりしてその日暮しでしたが、晩年は長男の新築した医院の奥の間で立派な大往生を遂げました。わたくしの学生のころ伯父は手造りの屏風に、万葉の山上憶良や大伴旅人の旅や酒の古歌などを達筆な万葉仮名で書いていたのを憶えています。現代のテレビや漫画で成長し、豊富な教科内容で教え込まれていても、どこか一本骨の抜けた現代の学校教育にくらべて、この稚拙な寺小屋教育に一片の涼味を覚えるのも、老いの繰り言とお笑い下さい。



富吉少年の書

編集後記

桜の花咲く四月に発行予定の4号を、六月にお手もとにお届けすることになってしまったことを深くお侘びいたします。▼次号は八月発行の予定です。大方のご支援をお願いいたします。（I記）

小城の歴史　第4号
発行者　小城郷土史研究会
（小城町西小路岩松方）
発行日　昭和44年6月30日
印刷所　小城町音成印刷所